

国際文化学部 国際文化学科

阿部哲也 小松麻里 阪野滉太 澄川千容、
長谷川冴佳 藤本知央 榊野真央、町浦朱帆、
邑中詩織 矢野菜奈美 山崎歩実 山田亜利沙、
竹林あかね、松崎佳奈 松元夏帆
(参加教員：岩野雅子、安野早己)



私たち「地域実習」履修生 15 名は、今回東日本で起きた震災の復興支援のボランティアに、大学、大隅グループ、シャンティ国際ボランティア会などのご協力をいただいて、5月29日～7月1日の間に、2回にわたって、宮城県の気仙沼市や岩手県の陸前高田市などへ行ってきました。

まず、1回目の活動では主にシャンティ国際ボランティア会の方に調整いただいて支援活動を行いました。具体的には、気仙沼市と陸前高田市の被害状況の調査、ガレキの撤去と溝の掃除、避難所周り、プレイパーク見学、海岸清掃などの活動を行いました。詳細は以下の通りです。

- ・行き先：宮城県気仙沼市（活動地）及び岩手県陸前高田市（視察地）
- ・日程：平成23年5月29日（日）～6月3日（金）
- ・旅程：山陽道～中国道～名神高速道路～東海北陸道～北陸自動車道～盤越道～東北自動車道～一関ICから一般道へ。片道約20時間、途中休憩8か所。（山口県、広島県、岡山県、兵庫県、京都府、滋賀県、岐阜県、富山県、新潟県、福島県、宮城県）運行規則上、運転手2名の交代制。
- ・一般参加者：(株)大隅関連会社から10名、コーディネーター1名
- ・受け入れ先：国連NGO団体SVA（シャンティ国際ボランティア会事務所）及び気仙沼市本吉地区清涼院内対策本部
- ・活動内容：避難所巡回の随行（本吉町本吉・大谷地区方面5か所、唐桑地区方面5か所）、本吉地区集会所付近のがれき撤去作業、大谷海岸付近のがれき撤去作業、登米沢（とよまざわ）集会所での楽しみのイベント手伝い・抹茶接待、学童の遊び場プレイパークの遊具修理、学童との交流等

5月31日に宮城県気仙沼市と岩手県陸前高田市の被害状況を見に行き、そこはガレキが辺り一面に散らばっており、本当に壊滅状態でここに町があったのかと疑うくらいでした。そこで、一日目気仙沼市の沿岸部でガレキ撤去作業を行いました。現地では、学生は3人～5人班に分かれて活動を行ったのですが、ガレキ撤去の作業は大隅の方やシャンティの方と合わせて10人がかりで1日中やっても溝を一本きれいにするのが精いっぱいでした。ま

た、陸前高田市では、カレキ撤去のための重機も多く入っており、集められたガレキは町のあちらこちらに山積みになっていました。このガレキの処分場所は、まだ決まっておらず夏にかけて臭いや虫などの問題があるというお話も聞きました。その他、避難所回りでは宮城県気仙沼市の唐桑地区と本吉地区の避難所回りをしました。そこで気付いたのは、主に避難所となっているのは公民館やお寺、小・中学校の体育館での問題です。震災から数ヶ月過ぎ仮設住宅が建設され、避難所から移動した人もいる中、未だに多くの避難者は避難所生活を送っています。ここで特に問題視したいのは、比較的小さな避難所ではコミュニティが上手く形成されており、被災者同士の関係も良好であったのですが、大きな避難所では各地から被災者が集まってきているため、孤立したお年寄りなどが目立っていたという現状です。このように、コミュニティが上手く形成されていない避難所では参加型のイベントが開催されています。しかし、多くのイベントが開催されることで逆に被災者を疲れさせてしまう結果になることもあります。また、子供たちは震災が起こって以降、大人に甘える傾向があります。しかし、被災して生活に追われていて余裕がない日々の中で親への負担を軽減し、子供を安心して遊ばせられる場所が必要です。そうした期待に応じて作られたのがプレイパークです。そこで、私たちは遊具を竹で作ったり、子どもと一緒にザリガニを取ったり、ポップコーンを作ったりしました。



2回目（6月28日～6月30日）は1日目に気仙沼市の小学校に行き、大学が既に送っていたパソコンについて、学校のはからいで全校生徒と先生方が体育館に集まり、贈呈式が行われました。そこで、学長からのメッセージをお伝えすることができました。また、県大生が書いた子ども達への手紙も手渡しました。その後、子どもたちと交流する機会が設けられ、1～3年生は絵本の読み聞かせをし、4～6年生は外で竹とんぼをして遊びました。運動場には仮設住宅が多くあったため、仮設の隣の駐車場と広場で行い、狭い中でも楽しく時間を過ごすことができました。



次に唐桑地区に移動し、聖敬会の方とご一緒に、避難所ではなくまだ残っている家一軒一軒を回って、ニーズ調査をしました。そこで感じたのは、家に住んでいる人に「何か協力できることはありますか」と尋ねると、「お願いできるのは被災者だけですよ？」と自分はまるで被災者ではないように言われます。私たちから見ると被災されているのにも関わらず、自分の中で家がなくなっている人や家族を亡くされたというようなひどい被害を受けられた方が被災者であると優先順位を決めている人がたくさんいました。ボランティアはこのような人たちにも目を向けなければなりません。また、調査をしていく中で、被災者の方からたくさんお話を聞くことができました。津波が来たときは高い場所に行くことが最優先であることや電池と電池式の携帯充電器を用意すべきだと、防災意識を喚起されました。その他、地震の翌日に、津波が来たとき船から流れ出たガソリンが燃えだしたのですが、漁師の方の判断ですぐ消し止められ、被害が最小限に食い止められたという生々しいお話も聞きました。

2日目は、陸前高田市に向かい、以前から連絡を取っていたよさこい団体の代表の方に会い、鳴子を渡しました。代表の方は仮設住宅の建設を手伝っていらっしゃいましたが、忙しい中、会いに来て下さいました。渡した鳴子は7月30日のお祭りで使っていただけるとのことでした。その後、山田町に向かい、退屈な避難所生活の中で気分転換として毛糸の編み物をされている方に、編み棒と毛糸を渡しました。会話をする中で、山田町の名物ホタテの形のアクリルたわしを作ると言う提案が出ました。そして作ったものを売り、その売り上げは山田町の集会所の資金になる予定です。



3日目は、別のよさこい団体の代表の方にラジカセを渡すために宮城県の登米に行きました。まだまだ練習開始には時間がかかるようですが喜んで下さり、私たちの方が元気をいただきました。その後、大谷公民館に移動し、お茶会と足湯をしました。仮設住宅の人が多かったので、仮設住宅に住む人たちに呼び掛け、来ていただきました。足湯が終わった人には、山口から持って行った山口饅頭とお抹茶をお出しし、とても好評でした。被災者方々の憩いの場を提供することで、被災者同士の世代を超えたコミュニケーションを図っていくことができるということもわかりました。私たちは現地に行く前、傾聴の練習やハ

ンドマッサージの練習をしてきました。その成果が現地で生かされたのではないかと思います。足湯に来られた方と会話をしていると、リアルな体験談を聞くこともできました。その中の一つとして、漁師さんから聞いたお話なのですが、先生が子どもたちをグラウンドに整列させていたのを見て、漁師さんたちの長年の勘からグラウンドには波が判断してくると判断し、先生たちに高い場所へ移動するように指示したそうです。実際に波はグラウンドまで来たので、その漁師さんの一声が多くの子供たちの命を救ったと言えるでしょう。

一回目に被災地へ訪れたとき、何か役に立ちたいと意気込んで行ったものの、ほとんど準備をしないまま、言われた活動を行うことしかできませんでした。本当に役に立っているだろうかという疑問が生じました。当初、自発的にすることがボランティアだと考えていたため行動したいけどできないもどかしさを感じていたのです。さらに瓦礫撤去や溝の掃除や海岸清掃をすることは成果を実感できる活動でしたが、活動が終わった後、誰にでも手伝える仕事をわざわざ山口から行ってする必要があったのかという疑問に思い、単純な作業では限界がある事も実感しました。逆に避難所まわりでは、被災地の方々と話をしたり、交流の機会がありましたが、そこでもまた私達が話を聞くことでその人の心が晴れるのか、元気になってもらえるのかという疑問を抱きながら活動しました。しかし、SVAの方たちの指示に従いボランティア活動を実際に経験していくうちに、自発的にすることも必要だけれど、まずは現状を知って被災者とコミュニケーションを取りながら協力することからはじめなければならないということに気づかされました。

1回目の活動のあと2回目に何をすればよいのか考える機会を得、現状を自分の目で見たことが役に立ちました。2回目に向けて誰もができることではなく、わたしたちができることは何かを考え始めました。1回目と2回目では被災地の現状も変わってきているし、被災者に寄り添った支援を行うことが今は大事なのではないかと考え始めました。私達自身を中心となって計画を立て、意見の交換もしながら準備を進めていきました。2回目では足湯、マッサージ、抹茶とお茶菓子の接待、絵本の読み聞かせをすることで、たくさんの方と話をすることができ、聞き取り調査では本当に被災者の方が今必要としているものが分かりました。また、小学校で子どもたちと竹とんぼを飛ばして交流した際には、「震災が起こってから今まで、外にでることが辛かったけど今日お姉ちゃんたちと竹とんぼをしてみたいと思えました」と言ってもらえ、私たちにもできることがあるということを実感しました。

2回にわたる活動の中で感じたことは、ボランティア活動は成果を求めるものではないということです。3日間の中で出来ることは限られています。毎日のように避難所に通っているボランティアの人たちと一緒に行動して、被災者と話されている様子を見てみると「信頼関係ができてきているのだな」ということを感じました。私達自身の1回目と2回目の気持ちの違いというものはとても大きく、ボランティアの難しさも知りました。活動を続けていくことが大事だということも分かりました。2回の活動の中で変化したことは私たち

自身のボランティアに対する考え方ではないかと思います。変化し続ける被災地の現状にこれからも目を向けて、山口県からできる支援を行なって行きたいと思います。まずは、その一歩として、大学内の売店で被災者の方々が作られたアクリルたわしを販売することを始めます。

今回、このプログラムに参加して、東日本大震災への考え方が大きく変わりました。今までは、力になりたいと思っていても月日が経つにつれて、メディアも報じなくなり、私たちもどこか他人事になっていた気がします。宮城に行って、初めて生で津波の傷跡を目にし、衝撃を受けたと同時に、ごみの中には、靴や衣服などがあり、ついこの間までここで人が普通に生活していたのだと思うと心が痛みました。しかし、何か力になりたい、行動したいという気持ちが本当に芽生えたとし、何がいまの私たちにできるか夜遅くまでみんなで話しあったりして、このような言葉を使うのが正しいとは言えないかもしれませんが、私たちの人生の中でも大きな経験になったと思います。もちろん、「力になりたい」という気持ちだけではどうにもならないことも学びました。支援するには、それなりの準備をしていかないと逆に迷惑をかけてしまうし、実際に必要とされる支援は現地にいかなければわからないと思いました。指示を待つのではなく、自ら行動し、その中で現地の人たちとの関わりも増え、新たな支援へと繋がると感じました。さらに、がれき撤去のように、作業ばかりでなく、足湯・傾聴・子どもたちと遊ぶ・他愛のない話をする・・・というような、小さなことでも現地の人たちを元気にすることができるということに気がつきました。もちろん、山口からでも募金・支援物資を送るなど、できることはたくさんあります。

正直、私たちができることはこのような小さなことしかないかもしれませんが、このような小さなことの積み重ねが1日も早く復興へ近づくための道なのだろうと思います。そして、継続していくこと。どんな小さな支援でもいいので、継続して行うことが求められると感じました。

このプログラムに参加して、私たちが作業できたのはほんの数日間だけでしたが、宮城の人たちの元気さと温かさに触れ、逆に私たちががんばろう、と思えました。私たちもいつこのような災害にあうかはわかりません。日本全体で協力し、被災地の方たちが1日も早くもとの生活を取り戻せるように私たちは祈っています。